

狭い条件下の園庭におけるビオトープ造成による生き物の変化及び園児への影響  
 ○笠松洸希 町田怜子助教授 麻生恵教授

本研究の目的は、狭い園内を対象にしたビオトープの計画・施工・活用のあり方を提供するための園内にビオトープを造成し、現状・効果・課題を検証した。

研究方法は、①園児たちの生き物や自然への触れ合いのかかわりを調査し、現状調査を行った後にビオトープの施工を実施した。②施工後のヒアリング調査を行い園児たちの意識の変化を調査した。③時間経過とともに変化していくビオトープ内の生き物の調査もした。④園児たちがよりビオトープや生き物に関心を持てるように教材制作として生き物カードの作成を実施し、園庭のビオトープ造成の教育活用のあり方を考察した。

現状での結果として園児たちは実際にできたビオトープに関心を示す一方で、新しくできた見慣れないものになかなか慣れず、ビオトープ内にいたずらをしてしまう園児がいたが、生き物が入ったことによりビオトープへの意識に少し変化が表れ、園児たちは砂を入れたり棒でつついたりかき混ぜたりしなくなった

年長の子を中心に年下の子たちにビオトープ内の生き物の説明をし、いたずらをしてはいけないなどの注意をする行動が見られ、ビオトープ造成による教育効果がみられた。

農村景観を教育素材とした食農教育のプログラム開発  
 ー成城幼稚園を事例としてー

○柴田裕貴〔東京農業大学〕・町田怜子〔東京農業大学〕・麻生恵〔東京農業大学〕

近年、「食農教育」への社会的関心が高まっている。我が国では急速な経済発展に伴い生活水準が向上し、食の外部化・簡素化・多様化も進み豊かになった。しかし一方で、不規則な食生活で食と農の距離が遠くなり、「食」の大切さ、「命」の尊さが伝わりにくくなっているのが現状である。また、普段口にする野菜の名前が分からないなどの知識不足だけではなく、子供の朝食欠食やコミュニケーションがなく一人で食事をする孤食が社会問題になるなど、将来を担う子供たちの食の乱れが重大な問題となっており、「食」と「農」を通じた教育「食農教育」の重要性が増している。また、食農教育は農業体験学習を行うことが多い。体験学習を行うだけでなく、日本の美しい農の風景への理解を含めた食農教育を行い、生産されている農産物の風景を知ること必要であると思う。

そこで、本研究では、成城幼稚園の園児を対象に食農教育を行い、日本の美しい農の風景で生産された農産物を用いた環境教育プログラムの開発をした。

その結果、農村景観を教育素材にする際には、日常的に利用している野菜を用いることにより、普段の活動から食農教育に繋がる遊びを経験でき、園児の農業に対する興味、関心へとつながった。